

「神様の恵みはだだ漏れ」 ローマの信徒への手紙3：20～31

I 導入部

おはようございます。7月の第1日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと主に、会堂に集い、あるいは、置かれた場所でライブ礼拝を通して礼拝をささげることのできることを感謝致します。

本日は、ローマの信徒への手紙3章20節から31節を通して、「**神様の恵みはだだ漏れ**」という題でお話しします。「ダダ漏れ」という言葉はあまり使用しない言葉かも知れません。

「だだ漏れ」の、「だだ」とは、「**むやみやたらに、無茶苦茶に**」という意味がありますが、「**まっしぐらに、一途に、ひたすら**」という意味もあるようです。ですから、「大量に漏れている」「ひたすらに漏れている」という意味です。また、本来封じ込めておくべきものが大量に外部に放出されるさまなどを表し、神様の恵みというものは、限りなく漏れてしまう、とめどなく漏れてしまう、私たちに注ぎかけられているということを見たいと思うのです。

II 本論部

一、圧倒的な神様の恵みのゆえに

パウロは、ローマの信徒への手紙1章、2章、3章前半で、人間の罪、神様のさばき、ユダヤ人と律法について、また正しい者は一人もいないという事を記しています。ユダヤ人は、神様から律法が与えられ、それを守ることを熱心に行っていました。律法というものは、完全な服従を要求します。律法が行われた時だけ、守られた時だけ、人間は義と認められるのです。しかし、現実には、人間は律法を守り通すことは誰一人できないのです。律法を守ることで救われないということです。3章20節には、「**なぜなら、律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです。**」とパウロは言います。リビングバイブルには、「**おわかりでしょうか。律法の命じることを行って、神に正しい者と認められようとしてもむだです。私たちは律法を深く知れば知るほど、自分が従っていないことが明らかになるのです。律法は私たちに、自分が罪人であることを自覚させるのです。**」とあります。ユダヤ人が忠実に守ろうとした律法は人を救えないし、義とすることは不可能なのです。

そして、21節です。「**ところが今や**」と宣言します。「**ところが今や**」と黒から白に変化するように、神様と人間の関係が変わったことを示しています。律法では救われない。義とされないという絶望的な状況から「**ところが今や**」と神様の恵みが示されるのです。「**律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。**」

と語ります。律法とは関係なく、神様ご自身が義を備えられた。義、正しさが要求するさばきを神様ご自身が備えられたのです。「**律法と預言者によって立証されて**」とは、旧約聖書が公的に証言しているということです。そして、神様ご自身が用意された義とさばきとは、イエス・キリスト様なのです。22節には、「**すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。**」とあります。イエス・キリスト様は、神様の栄光の完全な現れであり、罪の全くないお方、神様と同じ完全な方であり、神ご自身であるお方です。この方が私たちの犯した罪の身代わりに神様の裁きを受けられたのです。イエス様の十字架の死と復活を信じる信仰により義とされるのです。ユダヤ人たちは、律法を与えられ、律法を守る自分たちだけが救われると考えていました。ユダヤ人に何か優れた点があったのか。申命記7章6節から8節には、「**あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。ただ、あなたに対する主の愛のゆえに、あなたたちの先祖に誓われた誓いを守られたゆえに、主は力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである。**」とあります。ユダヤ人が選ばれたのは、彼らは貧弱であったのに、そのユダヤ人を神様が愛されたからだけで

す。優れた点とすれば、ユダヤ人には律法が与えられたということだけです。しかし、ユダヤ人は神様から律法が与えられたので罪がないというのではなく、神様の前で罪のない者は一人もいないということをはっきりと示すために律法が与えられたのです。「なぜなら、律法を実行することによって、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです。」と20節にあるとおりです。律法は、それを行うことで救いを得るという事ではなく、律法の役目は、人間に罪の自覚を与えるために与えられたものでした。神様の前にはユダヤ人も異邦人もないのです。神様はユダヤ人だけではなく、イエス様の十字架と復活を信じる信仰により、全ての人を救い、神様に義としていただけるのです。私たちも、その恵みに入れられていることを覚えて感謝したいと思います。

二、イエス様を通して義とされる

ユダヤ人が律法を行うということで抱いている誇りをパウロは徹底的に打ち砕こうとしました。それは、誇りや傲慢によって、罪がユダヤ人を支配していたからです。それは、パウロ自身がユダヤ人であり、復活のイエス様に出会うまで経験していたことでした。

23節、24節には、「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」とあります。「人は皆、罪を犯して」とあります。罪のもともとの意味は、「**的を外す**」です。神様の栄光という基準に達しない。神様の基準から外れてしまったのです。「**神の栄光を受けられなくなっています**」とは、全ての人がかたみに創造されたあの最初の栄光（創世記3章の人の創造）を失っている。罪の結果、神様との親しい、深い交わりから遠ざけられているのです。

「キリスト・イエスによる贖いの業」の「**贖い**」とは、もともとは商業用語です。買い取ることで。市場で他人の所有物を、代価を払うことにより、自分のものにするという意味です。旧約聖書には、「わたしはあなたを贖った」と神様が言われます。パウロ自身も、ユダヤ人であり、かつては、ユダヤ人以外の異邦人は救いに預かることができないと考えていた。パウロ自身、律法を厳格に忠実に、熱心に守る生活を送っていたのです。パウロは復活のイエス様に出会い、神様による赦しを経験し、全ての人々が罪の元にあることを認め、信仰による罪の赦しと与えられること、神様の恵みによって義とされるということを経験したのです。

25節には、「**神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさしました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。**」とあります。神様がイエス様を私たちの罪を償う供え物として立てたのは、神の義を示すためでした。神様は、イエス様の十字架を通して私たちの罪を赦して下さるのですが、それは、神様の義を示すためです。神様は義を示すために、救いのみ業があるということです。ですから、神様の義は、私たちに対する神様の救いなのです。

26節には、「**このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。**」とあります。「御自分が正しい方であることを明らかにし」とありますが、イエス様の十字架の死、贖いのみ業によって、神様ご自身の義、正しさが示され、確立したのです。このイエス様の十字架の死、贖いのみ業がなされるまでは、神様は人間の犯した罪を、忍耐を持って見逃がしてこられました。その時は、神様の義や正しさは示されなかったのです。神様の義が示され、神様の正しさが確立するためには、罪ある人間が裁かれ、罰せられる必要があったのです。それがイエス様の十字架の死なのです。私たちが罪のゆえに、受けなければならない神様の怒りと裁きをイエス様が引き受け、イエス様が罰を償う供え物として、十字架にかかって尊い血を流し、命をささげて下さった。死んで下さったのです。このことによって、神様の義、神様の正しさが示され確立したのです。同時に、罪のゆえに、裁かれるべき、死ぬべき罪人の私たちの罪が赦され、義とされるという救いが実現したのです。26節にある「**今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。**」というみ言葉の通りです。

三、律法の確立（信仰により救われ神様に従うことができる）

このパウロが語った神の義は、時がたって間違った教えがなされるようになりました。神様は御自分の義、御自分の正しさを物差しとして人間を裁かれる。そして、その裁きに耐えられる正しさや義を持つ者、義を獲得した者だけが救われるという教えがなされるようになりました。神様の義というものが、いつの間にか、神様が人を裁くための尺度になってしまいました。そうすると、救われる人は誰もいなくなります。それで、煉獄（れんごく）というものができて、神様の義という厳しい尺度に不足する人、足りない人は、死んだ後、煉獄で償いをして、それが終われば天国へ行けるのだと教えたのです。そのために、免罪符を作成して、煉獄での償いを免除されてストレートに天国へ行けるので、そのためにお札を買うようにと勧めたのです。免罪符は、罪を免除するお札ではなくて、煉獄での償いの免除される札だったのです。マルチン・ルターは、このような教えに対して、聖書から正しく再発見したのです。彼は、神の義は神様が人間を裁く物差し、尺度ではなくて、イエス様の十字架を信じて罪の赦しが与えられ、救って下さり、神様ご自身が、御自分の義を与えて下さるといふ神様の恵みを意味していることを示されたのです。

27節、28節には、「では、人の誇りはどこにあるのか。それは取り除かれました。どんな法則によってか。行いの法則によるのか。そうではない。信仰の法則によってです。

なぜなら、わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。」とあります。律法によって、私たちが義と認められるならば、私たちは行いによって誇ることができます。しかし、神様の示されたみ業は、恵みのゆえに私たちが義と認められるのです。だから、人間の誇りは取り除かれたのです。

29節、30節には、「それとも、神はユダヤ人だけの神でしょうか。異邦人の神でもないのですか。そうです。異邦人の神でもあります。実に、神は唯一だからです。この神は、割礼のある者を信仰のゆえに義とし、割礼のない者をも信仰によって義とさせていただきます。」とあります。ユダヤ人が救いに預かることは不可能だと思っていた異邦人も、神様による救い、祝福にあずかることができることをパウロは語ります。

31節には、「それでは、わたしたちは信仰によって、律法を無にするのか。決してそうではない。むしろ、律法を確立するのです。」とあります。リビングバイブルには、「それでは、信仰によって救われるのなら、もはや律法に従う必要はないことになるのでしょうか。いや、全く違います。私たちはイエスを信じてこそ、ほんとうに神の命令に従うことができるのです。」とあります。イエス様は、マタイによる福音書5章17節では、「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである。」と言われました。リビングバイブルでは、「誤解してはいけません。わたしは、モーセの律法や預言者の教え（旧約聖書）を無効にするために来たものではありません。かえって、それを完成させ、ことごとく実現させるために来たのです。」とあります。信仰によって、むしろ律法を確立するのです。

私たちは、立派な行いや律法を守るといふ行為によって救われる、義とされるのではなく、神様が用意して下さったイエス様の十字架と復活を通して、私たちの全ての罪を赦し、私たちを救い、義として下さり、死んでも生きる命、復活の命、永遠の命を与えて下さったのです。この恵みに預かり続けて信仰を歩みたいと思うのです。

III 結論部

私たちは現実の社会において、悪がはびこり、悪い事をしていても罰せられることなく栄えているという現実があります。映画やドラマではよくある話です。私たちは、そのように栄える悪や悪い人に対しては、「とんでもないことだ」と私たちは思い、正義が踏みにじられていることに我慢ならないことだと感じます。しかし、罪ある私たちが、その罪を赦され、神様の前に義とされ、赦されるという現実はおかしいと思わないでしょうか。神様の義が踏みにじられているのです。神様は、ご自身の義を神様の正義を立てつつ、同時に、罪ある者を赦し、義として救って下さるといふみ業をなされました。

私たちは、イエス様の十字架の死と復活を通して、過去、現在、未来の全ての罪が赦されていること、罪深い者が、神様の前に義とされているといふ神様の恵みを心から感謝と喜びを持って、日々神

様に答えていく者でありたいと思うのです。私たちが救われるためには、イエス様の尊い血が流され、イエス様がなだめの供え物として、神様の怒りを受け、贖いとなって下さったという神様の恵みを忘れないでいたいです。この神様の恵みは、全ての人に同じように、注がれているのです。ただ漏れなのです。あふれているのです。今たとえ罪の中にいても、問題の中にいても、苦しみや闘いの中にあろうとも、神様の恵みはあなたの上に注がれているのです。そのことを覚えて、感謝して、この週も歩んでまいりましょう。